

昭和二十四年七月二十三日
昭和二十三年八月十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第二二四号）

八年頭感謝Ⅴ

近角先生…(1)

是非しらず邪正もわかぬこの身なり…(2)

観無量寿経講話…(5)

無題録…(16)

わが信の旅…(18)

教えられることども…(22)

慈光

第二十卷 第一号

慈光はるかにかぶらしめ ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたもう 大安慰を帰命せよ。

世界を覆い、十方を尽くして照らしたもう無碍の光明は、
四海の同胞を悲憫して清浄、歡喜、智慧の功德を与えたもう
如何なる苦境にある人も、この光に遇えば、忽ちそ
の苦を滅し、如何なる楽境にある人も、この光に照らさる
ればその楽に着せず、無量寿のとしえなる希望を仰ぎ
て、無碍光の照耀を嘆ず。十二光讚歎の浄土和讃は、実に
年頭に於いて最もふさわしき感謝なり。

しかして我等においてこそ、年の始と云い終りと云う、
仏陀は無始より尽未來際に至るまですこしもかわりたもう
なし。我等においてこそ生と云い死と云う、仏陀は我等の
いたるところに常に待ち受けたもう。ああたのもしき慈光
なるかな。

○
逆境にあるときは、我身の苦のために覆われ去らんとす
されど仏陀は、その逆境にありて力を与え、慰めを与え、

希望を与えたもう。

○
順境にあるときは、我身の楽のために怠り去らんとす、
されど仏陀は、その順境にありて警告を与え、肅みを与え
抑損を与えたもう。

世に仏陀なかりせば、苦しめるものは自ら壊れん、樂し
めるものは自ら驕らん。
世に順逆あり、人に浮沈あり、しかして千古万古常住に
して変易なく、大悲常に照らして倦むことなきは、撰取の
心光なるかな。

○
我常に懈怠に陥るときに常に下したまう警告は仏力現前
して了々分明一毫疑いの余地なからしむるにあり、そは多
年苦しめる人の一冊の書、一席の講話に忽然として仏の大
慈悲に感泣渴仰して、即時に歡喜愛樂の人となる時にあり
かくの如き大なる力を現前に拜見したてまつるとき、我
は唯仰嘆したてまつるのみにして、我見強き我、一厘の私
をさしはさむこと能わず、唯渴仰の念仏は口に溢れ、感謝
の涙は知らず識らず両眼に滿ち、衣の中に得信の人を拜す
るを禁ずる能わざるなり。

(求道・第四卷第一号)

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて
小慈小悲もなければ、名利に人師このむなり。

嗚呼これ親鸞聖人の現存法語中最後の遺訓なり。御自身の
懺悔なり、心中の直写なり、深刻を極めたる御告白なり、
かえりみれば我身こそ真に小慈小悲もなき身なり、小善
小行もなき身なり。「蚊一つに施しかぬる我身かな」若し
微かなる慈悲心あるが如く見ゆることもあらば、これ偽善
なり、修飾なり、賢善精進を現するなり。しかして心中溢
るものは名利なり、内心みなざるものは名聞なり、利養
なり。宗教家と自任し、信仰を標榜して立つ、人世もつと
も醜きものは人師を気取りて東西に飛び廻れる名聞利養の
我身なるかな。

「誠に知りぬ、悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、
名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、
真証の証に近づくことを決まず、愧ずべし、傷むべし」
と。誰がために遺したまひし御言ぞや。

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてあり
けり」

聖人の御同心なかりせば、我身愛欲の虜、名利の奴、茫々
たる大海に迷い、有為の奥山に踏み入り、何れのところに
か津梁を求め、何の時か解脱を得ん。

真に聖人は真宗末代の明師なり、聖人の御導きあるにあ
らずんばいかでか仏智不思議に遇いたてまつるべき、いか
でか選択本願の不可思議を仰ぎたてまつることを得べき。

多生曠劫いかなる深厚なる因縁のありけるにや、末代の
今日、聖人の御教を蒙りて金剛の真信を獲たてまつること
をえたり。執持鈔に曰く。

「是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけ
れども、名利に人師を好むなり。往生ほどの一大事、凡
夫のはかるうべきことにあらず、ひとすじに如来にまか
せたてまつるべし」と。

嗚呼自然法爾の御力を仰ぎたてまつりて、ひとえに如来の

御はからいにまかせ、仏智不思議を仰ぎたてまつれば、我身は善悪、是非、邪正もわかぬ名利虚仮の醜虜なるかな。是れ聖人の絶筆なり、天地を動かす懺悔なり、人類のあらんかぎり救済したもう德音なり。

「そもそも我等、善悪是非の言を為すもの、皆自己を以て尺度とし、自見を以て標準となす。

「彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、なんぞ能く定むべけん」

是れ聖徳太子の垂訓にして、あたかも聖人の御自督とその揆を一にす。歎異鈔に曰く。

「聖人の仰せには善悪の二つ総じてもて存知せざるなりそのゆえは如来の御心によしとおほしめすほどに知りとおしたらばこそ、よきを知りたるにてもあらめ。如来のあしとおほしめすほどに知りとおしたらばこそあしさを知りたるにてもあらめど、煩惱具是の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそおおせはそうらしいか」と。

聖徳太子の遺訓に曰く、

「世間は虚仮なり、唯仏のみこれ真なり」と。

嗚呼、ますます前聖、後賢、その揆を一にす。真宗の淵

まいらす有様なり、真の智識の仰せを蒙る態度なり。地獄におちたりともさらに後悔すべからず候とは、かく我心をもつてきめこみたるにあらず、自余の行（念仏以外の諸行）をはげみ得ざるもの、何れの行も及び難き我身なればこの如き唯一の救済、仏智不思議に遇いたてまつる、これを信ぜざらんとするも信ぜざるを得ざるなり。

「何事のおわしますかは知らねども、ただとうとさに涙こぼる。西行法師」

「ただ不思議と信じつるうえは、とかくの御はからいあるべからず候。往生ほどの一大事、凡夫のはかろうべきにあらず。補処の弥勒菩薩をはじめとして仏智の不思議をはかろうべきにあらず、まして凡夫の浅智をや。かえすがえす如来の御ちかいにまかせてたてまつるべきなり」

嗚呼、われ苦しみて初めて煩惱具足の凡夫たることを自覚し、われつきあたりて初めて罪悪深重の我身たることをさとる。しかして初めてここに煩悶の声を挙げ、後悔の涙をそそぐ。何ぞ知らん、如来はかねて知ろしめして選択の本願をたてたまいしにあらずや煩惱具足の凡夫（いづれの行にても生死をはなるることなき身）と仰せられたるにあらずや。

ここにいたりて我等は、よしあしの言をさしはさむべき

源、遠く皇太子にありと謂つべきか。

善悪のはからいは、何れも我見を尺度とすればなり。我身の悪しきを悲しむは如来にも殊勝の至りなれど、是れ悪しきものをたすけんとの如来の大悲を疑うものなり。「仏如何ばかりの力ましますと知りてか、罪惡の身なれば、すぐわれがたしと思ふべき」

又わが行の善からんことを勉むるは如何にも感心の至りなれど、いまだ何れの行もおよび難き我身なることを自覚せざるものなり。仏かねてしろしめして、曾無一善の我身がために選択本願念仏を与えたまいしを知らざるものなり

世の信仰を口にし、救済を説くもの、唯信仰の一なるを知らずして、知らず識らず修養の力を加う。ために悪を悲しみ善を勉めんとす。その志やよみすべく、その心を尊むべし。されどこれ仏智不思議を仰がざるなり、義なきを義とせざるなり。聖人曰く。

「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせ地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」と。

是ただ念仏の一を見出したる姿なり、弥陀にたすけられ

余地を存せざるなり。善からんとはかろうも我身の価値を知らざるに座するなり、悪しきとて悲しむも如来の御存知なることを知らざるなり。

いわんや、悪しき者を助けたもう願なればとて、悪からんとはかろうは、ますます大悲の御心を知らざるものなりいわんや、他の悪を説き、善を評す、群盲の象をさぐるが如く、鳥（からす）の雌雄を争うに似たり。聖人曰く。

「ようようさまざま大小の聖人、善悪の凡夫の、みずからが身をよしとおもうころをすて、身をたのみず、あしきころをさかしくかえりみず、またひとをよし、あしとおもうころをすて、ひとすじに、具縛（悪業、煩惱にしばられる）の凡夫、屠沽（いやしき身）の下類、無碍光仏の不可思議の誓願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」と。

よしあしの文字をもしらぬひとはみなまことのころなりけるを

善悪の字しりがおほ

おおそらごとのかたちなり

是非知らず、邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなけれども

名利に人師をこのむなり。

親鸞聖人八十八才御筆。

観無量寿経講話

福島政雄

この前まいりました時に、観無量寿経の一番はじめのところ、阿闍世王のところをお話いたしました。今日はそのあとの方の十六の観法かんぽうというところを話してみたいと思っております。この会ですと以前に観無量寿経のお話を極くとびとびにお話したかに覚えております。このたびもあらためて読みかえして見ますというと、これは本当は私のお話の出来るお経ではないということを感じますのであります。まあ私なりにお経を拝読して、いろいろ感じましたことを申し上げるだけであります。

その前に、これはお経ではありませんで、謡曲の本であります。謡曲にしたしみのお方は御存じの弱法師（よろぼうし）という謡曲であります。これは河内国の高安の里に左衛門尉道俊しやうぶんという人がありまして、それが或人の讒言ざんげんによりまして、自分の子供を、「おいうしないて候」というのでありますから、追い出してしまつたというのであります。あとで、あれは自分が間違いであったと感じまし

たがもう子供は何処へ行ってしまったかわからない。ところが子供の方は非常に苦しい生活をして盲目になつてしまふのであります。

親の方は、あれは悪いことをしたというので二月のある日に施行（せぎよう）色々こまっている人々に施しをするのであります。そこに盲目になつていた子供、それが弱法師、あだ名でありますけれど、その子供が来まして、その施行をうけますのであります。その間にいろいろのこと、聖徳太子のことなども出ておりますけれども、父親がその弱法師に向つて、自分の子供とも知らずに、さあ夕方になつた夕陽が沈むころになつた、日想観をおがみたまえ——日想観とは今日申しますと十六観法の一番はじめであります。今夕陽が沈もうとしている、それをおがめというようなことであります。——そうすると盲目になつておりますからして心あてにする方に向い、東門をおがみ南無阿弥陀仏と申しますと、父親の方が、東の門というのはどうい

わけか、ここは天王寺の西の門ではないかというところ、天王寺の西門から遙かに望めば、その極楽の東の門じゃありませんか、とそんな理屈が一寸ありまして、それからそのあとのところでもあります。

盲目になつていられるけれども、盲目になります前にそのあたりの景色はすっかり見ておりますからして、そこをいうのであります。

「あら面白や、われ盲目とならざりしさきは常に見なれし境界なれば、何うたがいも浪花江の、江月照らし松風吹き、永夜の宵清何の為すところぞや。住吉の松のひまより眺むれば月落ちかかる淡路島山と眺めしは月影の、眺めしは月影のいまは入り日や落ちかゝるらん。日想観なれば、曇りも波の淡路絵島、須磨、明石、紀の海までも見えたり、見えたり満目青山は心にあり。おお見るぞとよ、見るぞとよ」

そこまで、つまり盲目になつていますけれども天王寺の西の門から瀬戸内海をずっと眺めたその景色は、今でも心の中にはっきりしているところどころでこういうことをのべまして、今のおしまいのところ、満目青山は心にあり今自分の云っている景色皆心にあり、おお見るぞとよ、見るぞとよ、見える見えるというところでもあります。

これを以前に謡曲を習つておりました頃、この弱法師と

いうのは大変大すきな謡曲でありまして、おしまひには、我が子であつた、自分が父親であるということがわかり連れて帰るということになつておりますが、今この話を持ち出しましたのは、この弱法師が盲目になつて見えなけれどもはっきり見える、そしてその見える景色は皆自分の心にありと、そののところに感じますのであります。

観無量寿経にそのところ、今日の日想観からはじめて十六観法、お浄土を見るのにこういう順序で、こういう順序でというように見るようにとそういう仏のお心持であります。それについてこういうことを感じますがどうでありませんか。私共はその弱法師の盲目のようなものであります。私共はお浄土を見る眼は持つておりません。持つておりませんがそのお浄土を見る目を今開いていただく。それでお浄土については自分は盲目でありますけれども、そのお浄土の景色というものを細かに説いて下さつてゐる。つまり、自分がこのお浄土については盲であるという感じを一番に私がお浄土であります。

そういうことで、またあらためてこのお経を読みましたのであります。実はそのようにして見せていただくのでありますけれども、仲々この満目青山は心にあり、と弱法師は云つておりますが、なかなか私自身はそうはいかぬというのを感じますのであります。と云いますのは、この十

六観法を読んでおりますと、ついでに行けないのであります。すこし読んで居りますうちに解らなくなるのであります。

はじめの日想観はまあわかるように思います。西に沈んで行く陽をじつと眺めて、目をつぶっても開けても、その夕陽の姿がはっきり見えるようにせよ、これはわかります。

その次には水を考えよというのであります。大きなひろびろとした水、一杯にたたえている、これを考えて見よという。これも私共、太平洋の岸なんかに行って向うを眺めたことがありますので、これでもまあ解りますように思います。

今度はその水が、ひろびろとした水がすっかり氷になつたと考えよ。その氷も瑠璃色の氷となつたと考えよ。

そこまではまあわかるようにあります。ところがそういう瑠璃色のひろびろとした、そこを地面として、そこに宝樹が一杯ならんでいる。一一に金、銀、瑠璃・琥珀・珊瑚・瑪瑙といふようなもので出来あがっている宝の樹が、七重行樹といつてずうつと七重にならんでいる、これを考えよとある。これもまあ想像がつかないではありません。

その次には池であります。そこに池があるということを考えて見よ。その池の水というものが何とも言えないいい水であります。八つの功德のある、そういう水であります。大無量寿経のお浄土のところを見てみますと、浄土

が住立空中と申しますか、この仏のお姿であつて、そこが十六の観法といつても一の大事な中心になると思つてあります。

つまり韋堤希夫人は、はじめは釈尊が、汝今知るや否や阿弥陀仏ここを去ること遠からず、仏様はそんな遠い十方億仏土の彼方にいらつしやるのじやない。あなたのすぐ近くにいらつしやる、この言葉は身にしみているのであります。が、いよいよこの無量寿仏が空中に立つていらつしやるという御姿に接して、その時はじめて韋堤希夫人の御信心が徹したというわけだと思つてあります。

このお経のはじめには、この前申しましたように、韋堤希夫人はさんざん愚痴をこぼして釈尊の前で璅路（ようらく）を絶ち身を投げ出して号泣するといふような韋堤希夫人が、ここではじめて仏の御慈悲といふものが身に徹して感ぜられる。これから韋堤希夫人がすっかり変つて来るのであります。その変つてきた姿は涅槃經にあらわれる韋堤希夫人であつて、阿闍世王が非常に苦しんでいる時、身体にも一杯腫物（でまぶた）が出来て苦しんでいる時に、だまつてそれを介抱する母親になられた。それがもうこの時からといふことを私は感じます。仏の御慈悲が韋堤希夫人の身に徹したと、空中住立の御姿といふのはそうした意味があります。これが一つ大事なところと思つてあります。

の衆がその池に入つて、胸まで水が来るようにと思つて胸までそれからすうと水が引いてしまふと思つと、すうと引いてしまふ。そのようなことが大経のお浄土のところには書いてあります。種々の功德をそなたの池と池の水があるところまではまあわかるように思つてあります。

ところがその次になりますといふと、無量寿仏が空中に立つてそこにお出ましになつた。そこに観世音菩薩と大勢至菩薩がその左右に立つておられる。

ここが非常に大事なところといふ感じを持ちますのであります。空中に住立（じゅうりゅう）したまう、空中にずっと立つていらつしやる。昔の御方の御註釈なんか見ますと、それは仏様がじつとしておられん、衆生がすっかり迷うている、悪いことばかりをしている有様を御覧遊ばされてじつとして居られないで立ち上つていらつしやる。成程その通りであると思つたのであります。私以前あるお方から聞いたことがありますが、あの真宗の御本尊としてまつていらつしやる御本尊のうちには、両方の御足を揃えていらつしやらないで、一方をずうと踏み出そうとしていらつしやる仏像があるそう、それが非常に意味が深い仏像で、立つてそして衆生を救いにおいでにならうといふところをそういう姿であらわしていらつしやるのであります。じつと坐つていられん、立つて衆生のいるところへ向寄せられる。それ

それからもう一つ大事なところは、これは一寸むつかしいところでありませうけれど、諸仏如来はこれ法界身なりとありますところで、仏様といふのは全宇宙にそのまことが達するといふ、そういうお方である。法界身（ほっかいしん）といふ言葉はまあ全宇宙が仏様のおからだと云つてもいい。これはあの十六の観法の中で一応仏の坐、仏の御像としてのおすがた、それから観世音、大勢至菩薩のお姿といふものを詳しく述べていられますが、あとに阿弥陀仏の本當のお姿といふものは廣大無辺なものであつて、その眼は四大海水の如し、たとえば太平洋のような大きい、そんなのが阿弥陀仏の眼であると、そういうことをいってありますからして、これがそれでありませう、諸仏如来はこれ法界身なり、全宇宙に遍満（へんまん）していらつしやる、それは別でない、私なら私の心の底にしみとおつて下さる。ただよその問題として仏様といふものは全宇宙にひろがっているものと、そんな風に考えては分らぬのであります。私なら私の心の底まで無限の智慧と慈悲とをもつて徹して下さる。そのところが、諸仏如来はこれ法界の身なり、一切衆生の心の中に入りたまう、一切衆生の心の中に諸仏如来ははいつていらつしやる。つまり仏のお慈悲が私なら私に徹して下さることを云つてあるのであります。

そうなつてくると、汝等心に仏を思ふ時、この心即ち三

十二相、八十随形好なり、それだから、汝等、あなたがた心に仏を念じる時、その想う心というものが、仏様のお姿としてのべていられる三十二相、八十随形好、八十のいろいろのいいお姿、それは仏様を心の奥に感じて仏様のお慈悲にすっかり自分の心を打ち開いて、お慈悲がすっかりとおっておる、仏様の三十二相とか、八十随形好というそのお姿がそのまま自分の心である。

是心是仏、この心これが仏である。それで仏様というものは、大きな海のようなもので心の中にまします。このところが何か哲学的に解釈したりすると間違いだらうと思ふのであります。自分が仏様のお慈悲を身にうけ、仏の智慧に照らされると、自分の姿というものに仏の三十二相八十随形好というものを感ずるのであって、そこに仏を自分が感ずる。それだからこの心に仏様がおつていらつしやる、自分の心が仏様を作るのじゃありません。自分の心が仏様を作つた、そんな仏様はすぐ消えて無くなつてしまいます。向うからの仏様が徹して、自分の身であらうか仏様のお心であらうか、そういう感じがおこるときに、そこに仏様のいのちというものが、私のこころのおくにしみじみと通る。それが即ち廣大無辺なる仏の智慧であり、慈悲でありますからして、全宇宙といっていい仏が、私の心に徹して全宇宙に遍してみつる仏様というものが、実は私

これまでの二点が十六観法のところの中心点になるところと思ひます。住立空中の仏様を自分が感ずるといふことそして自分が感ずればその仏の真実心といふものは、一切衆生に入りたまふ仏の真実心である。自分だけじゃない、とかく両方を合せてはじめて私共の信心の生活といふものがそこに成り立つわけでありませう。向うから徹して下さる。然し徹して下さる向うといふものは廣大無辺なる仏様である。だから自分に徹して下さるといふことは一切衆生の心に徹して下さることである。それでなくて、仏様というものは全宇宙に遍満して下さる廣大無辺なものであるといふように考へたのではそれは哲学になるかも知れませんが信仰にはならないのであります。だからこの観無量寿経のこのお言葉は間違つて受取ると、とんでもないところになつてくるのであります。

それから今の仏像のことをいってあります。これは無量寿仏のお姿とその有様、これは読んでみても、私に分りませんのであります。仏様の御眼は四大海水の如し、といふのでありますので、私共の考へから云へば、太平洋、大西洋、北氷洋や南氷洋、それらをみんな集めたような大きさということになります。これは分らぬところでありませう。

そして仏様はお身体のどの毛孔からも光明が出ている。

一人を目ざしての仏様である、お慈悲である。そういうところになりましようと思ふのであります。そういうことで仏様のこういふところが非常に大事なことでないかと思ひます。

このお経の言葉は随分はつきりといつてあるのであります。汝等心に仏様を想う時、その仏様を想う心が三十二相八十随形好という仏様のお姿そのものだ、と。そうすると自分の心をはなれて仏様があるんじゃない。然し仏様は自分の心で作つたものではない。仏のいのち、仏の真実心といふものが、この心に徹して来て下さる時に、その時にこの心これ仏なりといふ感じになる。つまり自分の心に仏様の全生命をうけいれているその姿がそうである。

それを間違ひますと、何、仏様といつても自分の心で作つたものであるところでありませう。それでなくて、私共の心に廣大無辺な仏様の心といふものがとおうてきますといふと、そうしますと今のようになつてくる。向うから仏の真実心といふものが私にとおつて下さる。そうすると私の世界そのものが廣大無辺な世界になる。今まではよくよしていた心が仏の廣大な御真実が私の心にとおつてくると、今までにない広い、そしてまたしみじみとした広い心になる。そのところをこういふ風にいつてありますことと感じますのであります。

その光明が須弥山の様に広大な光明である。その仏様の後光は百億も三千大千世界を集めたようである。三千大千世界という言葉はお経によく出てくる言葉であります。今の科学の世界で説明する人々は、それは三千大千世界である。星の世界を考へて見るがよい、向うの星のまた向う、また向うと、この宇宙といふものは限りがない、どこまでこの星の世界が続いているか分らん。だから三千大千世界どころじゃない、と、そういう風に科学的に説明されませうが、さあどうでありませう。成程星の世界といふものはそう云うものであります。成程星の世界といふものはそれが百億の三千大千世界の如しとあります。それはどういふ心持であらうか、星を考へて見よと云つても分らんのであります。ただ然し、仏の光といふものはどんなに沢山の人が現れて来てもみんなの人の心に徹する光である。そういう風に受取れば百億の三千大千世界の如しといふのがすこしは分るといふような気がします。そしてその光の中に恒河沙の数の化仏、その光の中にガンジス河の沙の数でも数えられぬほどの化仏、仮りの仏様が一杯、そんなところを読んで行きますと私共には中々分らなくなつてきます。

けれどもそういう廣大無辺な光であるが故に、私といふものにも徹つて下さつていふのであります。問題はつまり仏の光の廣大無辺であるといふことを何処から感ずるか

いうと、私なら私というものが実は仏様の世界から一番遠ざかっている人間であります。ことに私なんかは小さい時からお念仏の世界に育った者ではありませんし、他のことを考えていますし、仏教といつても最初は日蓮聖人のものを読んでおりました。それから法華経を読んで居りました。私は無量寿仏の光明から云えば、はるか昔か、一番遠いところに居ったというのが本当であります。その私に不思議なことには何時も申しますように二十六歳の七月、近角先生のおかげで、その時までお念仏なんかを極端に軽蔑して居りました私が、お念仏を申そうと思つたのではありません、それが自然に南無阿彌陀仏が浮んでくる。それが私のお念仏のはじまりであります。近角先生のあのお話を聞いたから、今夜からお念仏申すんだと、そんなことを考えたことはありません。自分の下宿に帰って静かな部屋に着いて見ると自然にお念仏が浮んでくる。そんなのは、仏から一番遠くにいた自分に無限の光がおつてきた。そういう風に考えてまいりますと、ここが多少わかるような気がいたしますのであります。

ここに有名な言葉、一一の光明はあまねく十万世界を照らし、念仏の衆生をみそなわし撰取して捨てたまわず、とこれが私共、始終うかがっている大事なお言葉であります。一一の光明であります。私なら私にとおつて下さる。あな

にたよるということでなしに、仏の無縁のお慈悲というものが私の上に続いている。

それで、私がそんなことをいつてえらい信仰があるのじやありません。私は、蓮如上人のものを召し上げる時に「如来聖人の後用（ごゆう）にて着食うよと仰せられ候」如来や聖人の御用で自分は食べさせて頂いているということをお仰言っています。私は食事の時に、その蓮如上人のお言葉を思い出すのであります。そして黙っております。もつともお念仏を申すところで食事を頂くのであります。もつとも私はちよつととられるところがありまして、皆様の前で合掌して食べるということをしないのであります。ここはちよつと私は変なところがあるのであります。自分は皆様の前で自分こそ信仰があるぞという風に、合掌して頂くと、ということをしたくないぞ、という、黙って私は頂くと、いうところがあります。人様の手本になることは出来ません。とにかく、仏心とは大慈悲これなり、無縁の慈悲をもつてもろもろの衆生を撰す、というのは非常にありがたところでもあります。

それにこういふことが問題になりませんか。阿彌陀仏は広大無辺であつて、御眼は四大海水の如しと、そんなことを云われても私共にピンと来ませんのであります。そうすると、この十六の観法の中に、小さな仏像を考えて見よ。

た方一人一人にとおつて下さるのであります。十万世界を照らすというのはこの私を照らして下さること、そして念仏の衆生を仏のむねにおさめいれて捨てたまわずということになります。その仏の心というものはどういふ心かと云えば、ここにはっきりと、仏心とは大慈悲これなり、無縁の慈悲をもつてもろもろの衆生を撰取したまう。仏のお心というものは広大な慈悲のお心である。この無縁の慈悲、お慈悲というものが無縁の慈悲であります。これが私共には中々出来ぬのであります。あの人は助けてあげようか、私が縁があればたすけてあげようかと、そういうことは考えております。ところが、仏のお慈悲というものは、無縁の慈悲で、何々の縁があるからお慈悲をとどけるといふのでなしに、どんなに縁の無いところにもそのお慈悲がおつてくる。縁がなければ慈悲ということはないというのは我々の有様でありますけれど、仏の慈悲というのは無縁の大慈悲、これが私共が前から聞いていますところで、私共にはそんな慈悲はありませんから直接わかるわけはありませんけれども、然しながら私に何処までも徹して下さるお慈悲ということになりますと、はじめは近角先生の御縁でありますけれども、何処までも徹して下さる、そうなるくと無縁の慈悲であります。近角先生はもうお亡くなりになつていられる、今近角先生を眼の前において仏の慈悲

その小さい仏像を考えてその仏像に御礼を申すことを考えて見よとあります。一丈八尺とか、六尺という御像であります。これが非常に大事なことと私は思うのであります。

前にも申し上げましたかも知れませんが、私の家内がもとキリスト教であります。それが私と結婚して、私がしきりに近角先生の話を聞きに行けといふものから、内心ひどく腹が立っていたのであります。けれども夫の云うことだから、まあまあといふので、お話を聞きに行つたのであります。お話を聞きしたあとに一人で近角先生に御目にかかつて、「仏教では仏像を拜んだりします、あんなのは偶像崇拜じゃありませんか」こう云つて見たのであります。そうしますと近角先生は「そんなことを考えている間は問題ならん」と仰言つた。それから、仏教には何かあるな、とその時からすこし仏教に心がむいてまいりました。その後家庭的に非常に苦しむことがありまして、それまでキリスト教の信仰があると思つていたので、何もなくて、結局近角先生をおしての仏のお慈悲ということに眼がさめたと申しております。今では私なんかより大分熱心であります。「あなたの信仰はなつていません」と毎日批判をうけるのであります。成程そうかも知れんと思つて聞いております。そういうこともあります。

これは清沢先生も申していられますが、仏像よりも名号、

名号よりも直接に仏の廣大無辺のいのちに接するというのが一番よいんだと。しかし私共はその小さな仏像を拜む、その御縁によって廣大無辺な仏の眞実生命というものを身にうけるのでありましてそれ位のものであります。觀無量壽經をいくら読みましても、御眼は四大海水の如しというような阿彌陀仏の御姿も分りません、それじや一寸接するという気になれないのでありますが、小さな仏像を拜んでおりますが、そのことによって廣大無辺なお慈悲を忘れ勝の私でありますがまたよびかえらして頂いて、こんなことでもあります。そこで觀無量壽經に小さな仏像を觀ぜよと云われておりますところが非常に大切なところだと思つておられるのであります。

それからお仕舞の方、上品上生、上品中生、上品下生、次に中品上生、中品中生、中品下生、更に下品上生、下品中生、下品下生のところで九種類の人間がいて、その一人の人々について述べてあります。

上品上生と云えば非常にすべてがととのつて立派な人のように説いてあります。至誠心とか深心とか廻向發願心とか、その出来る人であります。至誠心とはまことのころ、深心はふかいころ、三つには廻向發願することでありますが、もつともこの廻向というのは親鸞聖人は不廻向

つているが、その立派なことをしているということにひっかかっているから本当のところがひらけていない。それだからいよいよ死ぬるといふ時には迎へに行つてやらねばならないと、こういうことで、上品上生、中生などは、よい方の種類であります、阿彌陀仏の方ではあれはあんなところ引つかかっているから、あれを迎へに行つて切りはなしてやらねばならぬ、と思われるのであります。これは私の感じでありますから、どういふようにでもお取りになつてよろしいのであります、私はそのように感じますのであります。

そして段々あとになりますとお迎へがなくなる。迎へがなくなるといふのは、あんな奴は迎へに行つてやらなくていいと、そういうことでないと思つてあります。ずうと下品という人になりますと、悪いことばかりやっていると、それがいよいよ死ぬ時になりますと地獄の火が燃えてくる。私が幼い時に家にありました源平盛衰記に絵が入つておりました。それに清盛が死ぬる時に、地獄から火の車をもつて迎へにくる、そういうところを書いてあったのを見たことがあります、悪いことばかりやつた人間が、いよいよ死ぬるといふ時に、地獄の火がそこに燃えているのであります。するとそこに善知識があらわれますが、その人はもう死にかかつて中々氣力もなくなつて

と仰言つています。自分で善いことをして、その自分の善いことを仏様の方にめぐらしむけて、それを仏様からほめてでもいただくそんな積りの廻向というものは本物ではない。廻向といへば何処何処までも仏様からの廻向である。それが聖人の仰言ることでもあります。

そこで上品上生というところで至誠心・深心・廻向發願心といつてあるのは、矢張り聖人の仰言の意味でなくて、自分に何かよいことをして、それを仏様の方にめぐらしむけるという、そんなのであります。

そういう立派なことがあつて、それから種々大事なお經を読む、それから種々の修行をする、こういうのが上品上生になるので、一番立派な人間だということになつておりますけれど、私がおこを讀んで、こんなことを感じますがどうであります。

こういう立派な行をした人間が、いよいよ死ぬる時には、阿彌陀仏がお迎へにお出になる。阿彌陀如来が觀世音・大勢至、そして無数の化仏をしたがえて、この上品上生の人の死ぬる時にお迎へにお出になる、これはどういふものか？上品中生の人の時にもお迎へにお出になる。迎へにお出になるとは、どういふことか？それは上品上、中生の人は、立派なことをして自分分はこれで善くいくんだと思つてあります。それだから立派なことをや

そうすると善知識があつて、その者に十声でありますか南無阿彌陀仏を十返唱えさせるそれによって極樂に往生することが出来るのであります。その時お迎へがないのであります。あれはもう徹しているんだ、一生涯悪いことばかりやつたといふことをしみじみ感じて、そしてお念仏申している。これはもう迎へる必要はない。お念仏そのものでお浄土に行つているのであると、こういうことであるかと思つてあります。

それだから立派な行をした人にはお迎へがある、悪いことばかりの人にはお迎へはない、あんな奴は迎へてやらぬといふのでなくして、あれはもう徹しているから迎へる必要はない。そうでありましよう、私共でも、あれは迎へに行つてやらねば心配だといふ場合もありますし、あれはもう迎へてやる必要はないといふ場合もあります。迎へが無いといふところに無限の味わいがある、そのお迎へがない、南無阿彌陀仏ただ一つでお浄土へまいるといふのが実は他人事ではなくて私のことだといふことになつてきます。それだから上品とか中品とかそんなのは皆結構でありますけれど、私という人間はそんな立派な人間でなくして、ドン底まで行つて、どうにもならぬといふところでお念仏申すようになった人間でありますから、お迎へはいらぬお迎へはなさらぬといふようになっているのであります。ただ南無阿彌陀仏と唱えさせるといふのであります。そ

うすると一念の間、一寸ひとおもいの間に極楽世界に往生が出来る。そしてお迎えがないのであります。そこに非常に味の深いことがあるのでありまして、つまりお迎えを受けないような人間は誰であるか、それは自分であります。

下品下生のところを読んで、こんな悪いことは自分はやっていないがという心がありすならば、それは上品中品の方で、お迎えが必要な人間であるということになります。下品下生のところに自分の姿というものを見て、そこに徹してくればもうお迎えはない、お迎えはいらぬ、南無阿弥陀仏を唱える、そのこと、そこにお浄土というものを感している。近角先生がよく仰言ったのであります、仏のお浄土というものは、仏のお慈悲の中にある。お経には今いろいろ申しましたようにいろいろのことを美しく説いてありますが、その美しい七重行樹とが、八功德水とかいうものはみな弱法師が云っているように、みな心の問題であるというようになります。

そういうことでありまして、私共はただお経に美しいことをならべてある。それは実は、本当はこころの問題である。心の問題といっても、自分の心に広大無辺な、真実の仏のいのちを頂く、その頂いていくうえにおいてそこに宝の美しい姿というものがみんな仏のお慈悲の中にある。じやから金子先生なんかは一つ一つを、七重行樹はこういう意味だ、八功德水はこういう意味だと解釈していられますが、さあそう解釈することがいいのであるか、悪いのであ

るか、これは大分問題だろうと思っております。私、観無量寿経を読みましても、本当に私はわからぬのでありまして、今申し上げました位のところ、これも分っているのか、分っていないのか、皆様が御判断下されば結構と思うのであります。それじゃ大体今晚はこれくらいにしてやめにさして頂きます。昭和四十二年六月三日。

求法用心集

源通寺

随分骨を折りながら、この心に聞かせることに骨折るのは骨折りに損なり。この心に聞かせにかかるはつまらぬことなり。また無間の眼がさめぬ定散心なり。よく用心、すこしでも聞いてくれたらそれに心を休め、それにたまされて、してやられる。

十九願、二十願の人は、助かりにかかるのじや。

第十八願は、助かり様のない、逃ぐる奴、嫌う奴を手段にかけて、思いがけもなく信ぜしめられる故、嬉しがるう筈はなけれども、弥陀の手くだにかかりてみれば、機法のありのままが見える故、おのずから恐ろしいやら、嬉しいやらなり。

七十年何所成 七十年何の成すところぞ

都空事戯事耳 すべてそらごとたわごとのみ

唯有一句実在 ただ一句ありて実在す

南無阿弥陀仏 ナムアマミダブツ

(遺偈)

定散のかざりをすててまるはだか

ただ願力にひかれてぞ行く

無題録

北米大野静哲

(まえがき) 貴誌、七月、八月、九月の三号、何れも感銘深く拝読、再読させて頂きました。とりわけ七月中の菅瀨法師の玉稿、御病中の御法語は、言々句々今病中にある私をつよくつよく打つものばかりでした。九拜してくりかえしくりかえし身読せしめられました。右厚く御礼申し上げます。

なお右御法語を頂いての私の感激感銘を拙文であります。が当市、ロサンゼルス市の仏教会(洗心仏教会)の海野円了師に乞われるままに綴ったものを御目にかけて、不屈不撓の御精進に対し御礼の積りで同封いたしました。病弱のため私もここ二三年は殆んど原稿も書かず横着して居りますが、来年はいよいよ明治百年とか、病中ながら明治天皇の大御心を九牛の一毛たりとも汲みたいものと思念しております。

菅瀨芳英師は明治五年、広島県矢口、教蓮寺に生れ、後

佐伯定胤師(大和法隆寺管長)に師事、又、叡山でも学ばれました。やがて東京で同和学園を創設、大正六年四十六才に上皮癌の大病の中にも、その大劇痛を超えて、安祥として往生された信心堅固の好々人でありました。

この師が不治の痼疾を自覚せられての御病中の御法語は慈光誌十九巻第七号に掲載されましたが、言々句々今の私の胸にひびくもののみであります。今日はその中から左の一節だけを掲げて師の慈教を仰がせて頂きます。

御本典『信の巻』には「聞というは衆生、仏願の生起本末を聞いて疑心あることなき、これを聞という」とありて「信する」とは、仏願の生起本末を聞くなり。聞くというは仏の教を如実に聞信するなり。

煩惱具足の凡夫と仰せられるを聞いて信ずるなり。

ある婦人は「仏様から煩惱具足と呼びかけてくださったされましたのゆえ、何も心配はいりませぬなあ！」と申して喜ばれたり。誠にたやすくおうけの出来候すがたあらわれ、てゆかしくもまた尊きことに候。

「まことなるかな、撰取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ」と遊ばされるも、仰せのままを聞くことと存じ申し候。親様のやるせなきお慈悲を仰ぐ外なし……。

右の菅瀬法師の御病中の御法語中、わたくし（静哲）はとりわけ

「とかくなろう、なろうとつとむるなり。さなるにあらず、なろうとてなり得ぬ手許を仏かねてしろしめして、仏より煩惱具足の凡夫と仰せらるるを聞いて信ずるなり……」

との御慈語に全く感泣せしめられんばかりの感銘を覚えしめられるのであります。この感銘はどうして起るのかと自問自答しながら出来るだけ飾りなく、ありのままのことを綴ってみたいと念ずるや切なるものがあります。全く私事を申上げるのは恐縮の極みではありますがおゆるし下さい。

わが信の旅

数千年の昔、ギリシヤのデルフィの神殿にかかけられた「汝自身を知れ」という額の言葉は、如何なる時代にも、極めて意義深い教えである。自己を知れとは、唯自己を知ることだけでなく、自己を知るとは、一切を知ることであり、自分自身を知ることによって本当の生き甲斐を覚え、現実生活から遊離した、空虚な観念を脱却し、人間としての本当の人生がはじまる。

私の信仰は、自己反省から出発し、自己反省によって解決し、自己反省により感謝させられている。以下その次第を告白させて貰う。

世の中に多くの教えがあるが、せんじつめれば、次の二つになるようである。

- (一) 悪しきことをやめて、善いことをせよ。
 - (二) 悪くてもよい。
- 第一の、悪しきをやめて善いことをせよ、との教えは、

実は去る一九六五年一月十日、ある動機で「不語」¹¹しやべらないこと¹²を「私の心のちかい」としました。法兄法師の来訪をうけた折は従来のようにしやべらないで、聞き手となるということが、心のちかいであったのであります。が、来訪者をお迎えした途端に「不語のちかい」はいつも破れてしまうのであります。自分でしやべらない人間になろうなろうとつとめながら、そうなれないことは私としては、可なり深刻に自分自身の浅間しさを知らしめられ、又私自身の背負うている宿業本能の如何にしてもどうしてみようのない恐ろしいものであることをつくづく感じ入らしめられるのであります。

このような深刻な心の問題に直面しております時に、菅瀬法師の「とかくなろうなろうとつとむりなり。さなるにあらず。なろうとしてなり得ぬ手許を、仏かねてしろしめして、仏より煩惱具足の凡夫と仰せられるを聞いて信ずるなり……」との御法語を拝して、これこそ私一人のために御用意下されし仏声として押しいただいたのであります。「仏語は生きています、仏語は生きています」と繰り返し繰り返し感佩、感戴いたしました。

南無阿弥陀仏、南無仏阿弥陀仏。 合掌

和才誠司

まさにその通りで、異議をさしはさむ余地はない。けれどもいざ実行となると、私には不可能である。意志薄弱ともしられようが、無力無能の私には、事実如何ともして見ようがない。

第二の教え、悪くてもよい、とは外道の声、一寸楽に聞えるが、安心は出来ない。悪くてもよいくらいなら何も問題はないのであるが、悪くでは困るからこそ、道を求め、修業に志しているのである。

私の日常生活において、時には道義心に駆られ、一生懸命努力するが、なかなか思うように善くなれぬ。これではいかぬと更に奮起するが、永続させぬ。そこで自分の理想通りにはなれぬが、自分は出来る限りのことをしている人並以上のことをしているのだからこれでよいのだと、思っている。このように放任し、このようにあきらめて見るものの、思うようにならぬ現実に直面し、自分の心が紊るにつけ、これではならぬと、更に亦奮起する。奮起はす

るが、これも亦永続きせぬ。このように悪いことをやめて善いことをしようと、奮起したり、自分では出来得るかぎりのことをしている、万策尽きたのだから、やむを得ないこれでよいのだと、前記(一)と(二)の二つの教えを、行きつ戻りつ繰り返しているのが私の実態である。これだといきめ手がない。

このように、実行困難の教えと、あやまった外道の教えとを結びつけたところで、解決出来ぬことは道理の上から火を見るより明瞭であるが、これが他人のことなら、直ちに批判し、判断を下すが、悲しきかな私自身の問題であるから、眼がくらみ迷ってしまう。

信仰問題についてもこれと同様、時には熱心に道を求め感謝の気持が起り、信仰をいだけたと喜ぶが、不如意の事件が起り、不平不満が湧き出ると、信仰が壊れたと歎く信仰の道理、理屈、筋道はよく心得た積りでいて、しかも現実には信仰が身に着いていない。喜べぬが、おたすけに間違いない、おたすけに間違いないが喜べぬと、自己の心を中心とした円周上を感謝と不安とが互いに追いかけている。結局ここぞと云う徹底したきめてがない。

これが私の日常生活の上から、もっと具体的に云うならば、世間の人は皆おのれの利益のため他人をたましているの不甲斐なきをなげいている時、私のこの悩みを知り尽くし、どこどこまでもたすけ逃げねばやまぬ、常に私から離れ給わぬ阿弥陀仏のお慈悲に触れ、はじめて安心させられた。

善悪を詮議することなく、善悪を超越した親心、お慈悲におまかせして、仏にたよることであった。

人は空き腹でなければ食物の味を本当に味わいかねるように、法の味わいは、己の罪悪を本当に体験し、反省したものならではの実感がある。

『本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に』 (歎異鈔第一章)

と、善悪を超越した境地は、罪悪に苦しんだ体験者に格別の味わいがある。

祖師聖人が『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり』(歎異鈔後序)とか、『いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』(歎異鈔第二章)と述懐せられたお言葉は自己を反省し、真に罪悪を自覚した体験者ならではの味わいがたい実感ではあるまいか。

以上私は自己反省を強調したが、自己反省はもとより救

から、私はせめて人からたまされぬよう用心しているが、現実には私が愚なため常に人からたまされている。私は人をたまさない積りでいるが、私も亦おのれの利益のため常に人をたましている。孤と狸とのたましい、何とおそろしい、現実ではないか。

この通り、善いことをしようと努めても、善いことが出来ず、悪くてもよいと、悪を許しても安心出来ず、絶体絶命、進退きわまった時、ここにはじめて、救いの声が聞えたのである。

(三) 悪いのがかわいそうだと、見捨て給わぬ絶対の慈悲。

私は真宗の家庭に生れ、幼少の頃から真宗の話を聞かれ、罪悪深重と云う言葉も聞かされたが、私が真実に罪悪深重の者であるとの自覚はなかった。罪悪深重と云う言葉は念仏者のきまり文句で、念仏はあだかも、凡夫のかくれ蓑、かくれ笠のようにも思われたが、近角常観先生の教えを仰ぐようになってから、実際問題を通して、自己を反省して、ようやく自己の無智無能、罪悪深重を知らされ、阿弥陀仏のお慈悲が、言葉でなく、身近かに感ぜられるようになった。

自己をかえりみるのに、一生懸命努力しても、何ともして見ようなく、又放任して置いても安心出来ない私が、罪悪に苦しんでいる時、人生の無常に悩んでいる時、自己

いの条件でない。唯私が自己反省により信仰に入り、自己反省により現在念仏相続をさせられている事実を告白したに過ぎない。

明治三十八年春、あだかも日露戦争たけなわの際、私が陸軍士官学校在学中、求道学舎(求道会館はまだ出来ていなかった)の日曜講話、座談会に出席した時、たまたま東大学生間に、阿弥陀仏は実在するや否やにつき、相論が勃発した。

近角先生はじめ黙して居られたが、議論がいよいよはげしくなると、かねて柔和な先生が、極めて毅然たる態度信念にあふるるおももちで、

「請君はこれまで私の話していることを何と聞いているか?、私が現に仏に遇い、その事実を伝えて聞いている話ではない、現実である」と論じられた。今まで喧々囂々(けんけんこうどう)と議論された。今まで喧々囂々と議論していた学生が、この一言で、にわかには頭がさがり、先生の熱烈な信念に、出席者一同魅了(めりよう)せられ、深く感激した。

その有様は、いかにも歎仏偈の『光顔魏々として威神極り無し。かくの如きの焰明ともに等しきもの無し。如来の容顔は世に超えたまいてともがらなし。正覚の大音は響き十方に流る』を、眼のあたり現実に見せて貰い、人間としての信念の偉大さを直感せしめられた。

また、あるときは、先生御講話中、お慈悲に胸せまりて涙にむせび、声が出でず、今日はこれで話を止めさしてくれと、講話を中止せられたこともあり、求道学舎における先生の体験を通じての御教化は深く肝に銘じた。

その頃求道学舎に参集するものは、学生ばかり。学舎が東京大学赤門前にあるため、東大学生が主力にて約八割、其の他は東京高等師範や東京女子高等師範の学生が多いようであった。軍服を着用した武学生は、私一人であるため人目をひき恐縮したが、戦争中とて皆さんから親切にして貰ったことは、今も忘れられぬ。

ついでに、私の今の心境を卒直に語らせて貰うならば、
一、私は自己の力で生きていくのでなく、大なる力と恵みによって生かされている。

一、私は空気がなければ生きていくことが出来ぬ。空気によりて生かされている。自然の大なる力、恵みによるものである。

一、私は食事をせねば生きることが出来ぬ。食物によって生かされている。その食物は動植物をはじめ、あらゆるものの犠牲によるものである。

一、私は光によってものを見、音波によって声を聞いている。見るもの、聞くものみな他力である。

教えられることども

衆禍の波轉す

十年ほど前、奈良の女子大を卒業して、T市で教職につかれたTさんが、数度来庵されて歎異鈔を語り合いました。当時Tさんはサッパリ歎異鈔がわからぬのでゆっくり筆写までして繰り返しておられた由であります。

その後結婚もして、N市に住むようになり、三人のお子さんも恵まれました。そして歎異鈔からは遠ざかっておられたのでありますが、三人目のお子さんは生れた時から弱く、とうとう亡くなられました。

さて子を亡くされて、その悲しみの底に沈まれたTさんは毎日愚痴の涙のやまぬ中であって、フト、歎異鈔の第四條

「今生いかにいとおしふんと思ふとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」

の一句が心に浮び、聖人が直々にお慰め下さる声におどろくと共に、今迄チンプンカンプンだった歎異鈔が、あそこ

一、私に利益になる昆虫を益虫、害になるものを害虫と、私自身勝手に名付けている。私は自分勝手に、おのれに都合よき理屈をつける奴である。

一、私の生活は、私の関係者のおなきけ、おめぐみにより営んでいる。みなさんのお蔭によって生かされている。

かく云うと人生をあまりに悲観していると云われるかも知れぬが、事実、私自身便りになるもの、楽観し得るもの何一つない、唯云えることは、この無力無能の私をあわれみたまう阿弥陀仏のお慈悲のみである。

つまり、私の罪悪を自覚すればするほど仏にたよる外にたどるべき道がないことを痛感する。自己を反省せよと、他人に向って呼びかけるのでなく、私自身に、私の心に向い声を大にして叫ばざるを得ぬ。

人生において、真の良師、真の善知識に遇うことはむずかしい。私は幸にして得がたき善知識、近角常観先生に師事することができ、信仰に眼を開かせて貰った。仏恩を感謝するとともに、師の恩を、今日深く感謝している。

四十二年十一月七日。

以上。

花田正夫

ここと有難く頂かれてくるにおよんで、思わず驚いたことは、親の心の眼をあの子はいのちをすてて開いてくれた。これほどの親孝行が他にあるであろうか。本当に亡き子は親孝行者であった、と遺影の前に念仏裡にお礼を申しました……と。

私はTさんの涙の物語りをききながら、聖人のみ声のひびくところ、仏心の不思議なはたらきから、禍がおのずから転ぜられる尊さをまのあたり教えられました。

夢の世をあだにはかなき世としれと

おしえてかえる子は知識なり

泉式部の古歌も生き生きと味わわせて貰いました。

歎異鈔を讀みなさい

昨年十月末の日曜、池山先生の三十回忌の京都の一道会で、御長男の寿夫様の御述懐は、心に深くしみしました。

その一つ、

「父はお訪ね下さる方の種々な問題をおききして、それをよいともわるいとも云わないで、ああそうですか、とこたえ、しばらくして、〃歎異鈔を読みなさい〃とすすめておりました。

父は人間同志の同情といったものでは結局不徹底に終ることをよく知っていて、歎異鈔の中から光を見出すようにおすすめておりました」

このことは私も覚えがあります。家庭問題で苦しきのあまり、先生に或時愚痴をなされました時、黙って聞いていて下さって、やがて念仏の中から

「君と僕とは境遇もちがいがい性格もかわっている。だから君の身になってどんなに考えても、靴の上から痒いところを搔く程度しか出来ないね」と言われて、あとは歎異鈔の何処かをお話し下さった。

寿夫様のお話のその二、

「父は母の命日とか、何事かあると、一家揃って歎異鈔をくり読みをしました。それも最後の十八条まで残らず読むのです。

当時私は大学に入っており、妹も女学校を卒えていま

ました。」

この池山先生のお心は、寿夫様にも、敏郎様にも、愛子様にも、現に大いなるひかりとなって、先生の望まれる通りに建現しておることは、私のよく知るところであります。

否、御子様ばかりでなく、先生に接した人々がこのらず歎異鈔を生涯の好伴侶として、いのちの生き杖として、常にくりかえして居りますことは、先生をとおしての如来聖人の切なる願いの建現であります。

寿夫様のお話の三つ。

「父は来客をよろこびましたが、ことに同信の人々と、座敷に坐って、お茶を飲んだり、煙草をふかしたりして、時々〃そうだよ〃とか、〃本当にそうですか〃などと断片的な言葉だけを交して居ることがありました。しかも時には夜の十一時や一時頃までそんな風で過ごすのです。退席なことは無いだろうかと思つたこともありましたが、実はその時は、目に見えぬ一人の方と父をはじめその座の人達が直接に語り合つていたのです。だからもつとも充実した沈黙の時間なのです。今一人の方とは、一人いてよろこばば二人と思ふべし、その一人は親鸞なり、の

たが、その次、その次の弟妹はまだ小学校です。それらに皆読ませるのでした。その当時、こればかりは無理なことだと思つておりましたが、その父の心が終戦後はじめてわかつてきたのです。

私はペルーに居りましたので開戦によって交換船で送るかえされました。その後日本は戦に敗れましたので、感ずるところがあつて私共一家は高知の山奥の開拓団に入つて、土地を拓いて野菜やら麦を作りました。然し金銭が入らないので、大根や人参や牛蒡を車につんで二里ばかり離れた町に売りに行きました。何分慣れぬ仕事とて途中で荷物がとけて大根や人参をおとしたり、荷造りを仕直したりして難儀をしました。

その時フト、敗戦後こんなことをして居てよいのだろうか？と疑問もおこりましたが、或時、イヤこれでよいのだ、自分が慣れぬ手で鋏を持ち車をひいて野菜を売っている姿を子供達の目に刻みこんでおけば、子供達が将来難波な境遇におちるようなことがあつても、その時、素裸で立ちあがる力となるということを感じました。

その時です。父が小さい弟妹達にまで歎異鈔と一緒に讀ませた真意がわかつたのは、人生いよいよの時歎異鈔こそは唯一のひかりを与えて下さるから、このように読むのだよ、と身をもつて父は教えていたのであり

お一人なのです。」

先生は常に私共にこの目に見えぬ今一人の方を指しておられたのでありますが、私共は先生だけが覚えて、その方に気づかないで、チグハグな思いで帰つたこともありましたが、さて先生が亡くなられてから、今ではそのお方一つをお念仏の中に知らされて、本当の先生のお心にお亡くなりになっていよいよ親しく触れさせて頂いております。私共は姿形がある間はそれにひっかかつておりますが、そのお姿を消されて、かえつて形をこえたものにふれはじめるものです。それにつけても、我が身の愚鈍さと、執着の強さにあきれるばかりであります。

ゆずり葉

河井 醉 茗

子供たちよ

これは譲り葉の木です

このゆずり葉は

新しい葉が出来る

入れ代つて古い葉が落ちてしまふのです

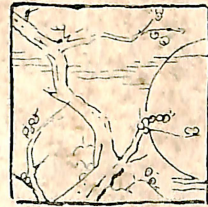
こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作に落ちる

新しい葉にいのちを譲つて――

あ と が き



年頭に近角先生の迎春のおよろこびを求道誌から頂きました。まことに念仏に照護せられてこそ正月も芽出度いと申せることとであります。

蓮師は「歳末の御礼には信心をとつてせよ」「歳旦のお祝には先ずお念仏申せ」と信心と念仏に歳末歳始を貫ぬいてお導き下さっておりますことも、年と共に身にしみることとあります。

また近角先生が聖人の生涯のお書きじまいの和讃二首を中心に、ただ念仏のまこと一つをお示し下さった原稿を掲げさせて頂きました。

観無量寿経の御講話は、前回に続きますが、救いなき世に救いをお示し下さる仏陀の善巧の程いよ／＼感佩させて頂きましたと共に、ことに福島先生が最下の衆生のところに身をおかれての信味をありがたくいただきました。

北米の大野静哲師は、生涯を北米開教の

仕事に打ちこんでいられますが、数年来御健康をそこねられ静養生活をしていられます。その中で有縁の同朋と念仏の手をいよいよ深く結んで居られます。今度菅瀬芳英師の病中の法語に共感されたままをお送り下さいました。私とは足利浄円師を介して御道交をうけております方であります。

九州の和才誠司翁は、御自身の信の歩みをかえりみられて貴重な原稿を頂きました。戦没学徒の会のお世話もして下さって、軍人としてのお生涯の終りを、念仏裡にすこやかに悠々とお送りになっていられます。

蓬戸不出の私の上に、色々の方々から、信味の深いもの新らしいものを頂きました。池山寿夫様の御話はいずれ榊原徳草師から詳細にお送り下さることと存じますが、私の所感の一端を述べました。

新春のしらべ

- 恵まれて 自然・法爾の春を祝ぐ
- 宿業の 大地にたちて 春仰ぐ
- 仰信や 救いの御酒に 初日かな
- いささかの 所労に暗き 老ころ
- あわれむ大悲いよいよ強し

御案内

- ◎ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。
- ◎ 市電新郊通り一丁目下車。東へ入ル三筋目左入ル二軒目。
- ◎ 毎月二十四日、午前・午后、法話会。
- ◎ 昭和区小桜町、教西寺、市電、御器所通り下車。桜花学園の東側

定価 半年 二百五十円（送共）
 一年 五百円（送共）
 名古屋市南区駈上町二ノ八八
 編集・発行人 花田 正夫
 電話八二二局七〇三七番
 愛知県西加茂郡三好町大宇福谷
 印刷 人 本田 政雄
 名古屋市南区駈上町二ノ八八
 発行所 慈光社
 振替口座名古屋一〇四七〇番